こどもの権利ワークショップ実施報告書

2026 Vol. 03

主催：浜松市こども若者政策課
運営受託者：一般社団法人 こどもアドボカシーセンター浜松
協力：認定NPO法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

第3回ワークショップ 実施プログラムと当日の様子

実施概要

開催日時 令和8年（2026年）10月25日（日）13:30～15:30　参加数 21名（小・中学生15名、高校・大学生他6名）
開催場所 浜松市勤労福祉センター（アイミティ浜松） 2F会議室




プログラム①

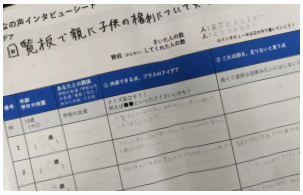
オープニング ＆ フォーラムの概要確認

グラウンドルール「4つのC」を全体で再確認し、安心・安全な場づくりを行ったうえでスタートしました。
全3回プログラムの最終回として、11月15日開催の「浜松市こどもの権利フォーラム2026」に向けたゴールと、本日の目的に対する全体意識を合わせました。

プログラム②

発表アイデアの決定 ＆ 手書き発表フリップ・原稿作成

各自が持ち寄った宿題（インタビューや反響データ）をグループ内で共有。第3回は全体のまとめとして、フォーラム当日にプロジェクターで投影する「手書き発表フリップ（A4用紙）」の制作に取り組みました。サインペンやカラーペンで視覚的に伝える表現を工夫しながら、発表担当パートの口頭スピーチ原稿を整えていきました。











プログラム③

フォーラム役割確認 ＆ 骨子リハーサル

フォーラム当日のプログラム全体像や会場での動きを確認しました。併せて、当日の運営サポート（司会、受付・案内、付箋パネル移動、舞台設営・転換）及びパネルディスカッション登壇者の役割エントリーシートを記入し、役割分担を決定。その後、グループ内で本番を想定した骨子リハーサルを実施しました。






プログラム④

全体共有 ＆ クロージング

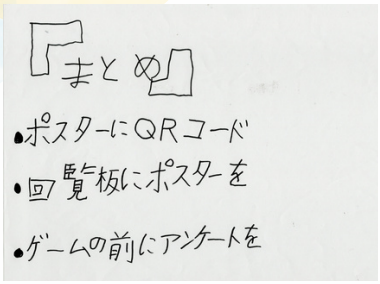
グループごとに発表の骨子や意気込みを全体へ共有し、本番に向けた気持ちを高め合いました。最後に3回目の感想共有（チェックアウト）を行い、全3回のワークショッププログラムを締めくくりました。

アイデアの記録

A：『権利を知れるゲームをつくる！＆学校・地域への発信』

主なアイデア： 楽しみながら学べる権利ゲーム（スマホゲーム・クイズ）、学校への本音を集めるアンケート、教室やトイレへのポスター掲示（QRコード付）、地域向け回覧板の活用など。

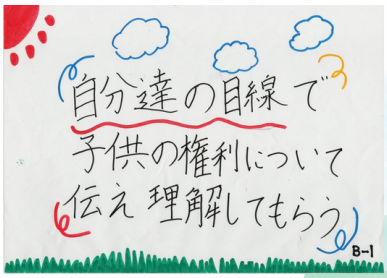
ポイント・ピックアップ： 話し合いの中で「視覚や聴覚に障害のある方にはデジタルゲームは難しいのでは？」という意見がこどもたちから上がり、「点字をつけたり、触ったりして楽しめるアナログゲームも作ろう！」という深い配慮とバリアフリーへの気づきが生まれた提案となりました。



B：『自分達の目線で こどもの権利について伝え理解してもらう』

主なアイデア：子どもの権利条約の４原則の周知、データに基づく手法選択（クイズ33%、アニメ25%、ポスター16%等）、Googleキャンバスによる絵本制作、最後まで遊べる権利ゲーム、給食中のTVアニメ放送。

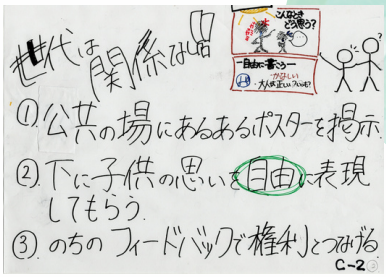
ポイント・ピックアップ： 「6年生の90%が権利を知らない」「座ったまま・きくだけの授業はNG！」という実態を踏まえ、大人の押し付けではなく「自分たちの言葉とコンテンツで同世代へ届ける参加型・体験型のアプローチ」を最後まで追求しました。



C：『学校で見つけるこどもの権利＆体験・問いかけ型発信』

主なアイデア： 公共の場（駅やスーパー等）での「あるあるポスター」掲示と意見収集、心理テスト風チェックリスト、YouTubeショート動画配信、植物の育成に例えたシミュレーション授業。

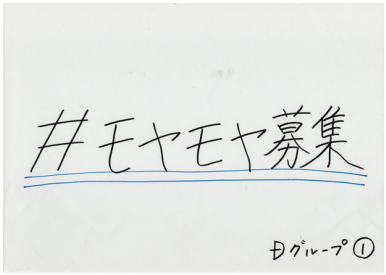
ポイント・ピックアップ： 「こどもの意見を最後まで聴いていますか？」「休むことに理由はいらない！」といった大人社会への問いかけや、水や日光の与え方を例に平等性・公平性を可視化する独自の授業案など、多角的な視点が光りました。



D：『#モヤモヤ募集 ＆ 意見の可視化・権利の保障』

主なアイデア： 市公式SNS等を活用したハッシュタグ（#）での意見募集、集まった声の匿名可視化・共有、当事者の声に基づく権利保障メッセージの発信。

ポイント・ピックアップ： 「権利を主張すると『義務を果たせ』と言われる」という身近な葛藤を出発点に、「権利と義務はセットではない」という本質的なテーマを整理。「こども・若者の権利は奪ってはいけない」という強い軸を打ち出しました。





参加者の声・3回目を終えて（運営より）

- 「発表のイメージがまだしっかりつかめず緊張するけれど、自分の言葉で伝えるのをがんばりたい！」（小学生）
- 「スライドも原稿も準備をしっかり整えて、進行や発表がうまくいくように頑張りたい。」（中高生）
- 「すごいな！浜松一年生(浜松在住１年)でこんな企画に参加できて感謝！」（若者世代）
- 「自分にもできることがあるとわかってよかった。」（若者世代）
- 「パネル登壇を担当することになってプレッシャーもあるけれど、形作られていく過程に身を置けたのは貴重な経験だった。」（若者世代）

（運営より）全3回のワークショップを通して、こどもたちが自分たちの言葉で語り合い、互いの違いを認めながらアイデアを形にしていくプロセスを踏むことができました。
障がい者への配慮が生まれたり、得意な役割を見つけて一丸となるなど、権利の理念がこどもたち自身の中に深く根付いていることを実感する最終回となりました。